

差別問題教育のパラドクス

秦野伸介（龍谷大学非常勤講師）

ある事例から

A,B 二つの回答はある授業で差別問題を取り上げた際に書かせた小レポートであり、回答者は同一人物である。A は授業開始早々の回答であり、B は授業が数回進んだあとの回答である。

「あなたが何気なく言った発言を人から「それは差別表現だ」と指摘され、非難されたら、どう対処し、振る舞うか」

A とりあえずあやまる。自分が何気なく言った言葉でも相手を傷つけてしまったとしたら謝るのが当然でしょ。私はそんなつもりで発言したんじゃないと言うことを分かってもらえるまで説明する。相手の被害妄想かもしれないし、ちゃんと話し合わないとお互いつらいだけだから・・・。

「身内に同性愛者がいたら、その人とどう接するか」

B もし自分の身内だったら嫌だ。兄弟の縁を切りたい。その人の自由といえはそれまでだけど、私にも周りの人達にも立場ってものがあります。差別だ、偏見だといって意見を述べているあなたをみたら人は「えらい」「頑張っている」と思ってくれるかも知れない。でも私からみたら周りのことを考えないただの「わがまま」にしか思えない。「何被害者ぶってんの?」ってかんじですね。

この授業－A から B の間になされた授業－は、学生の認識に関してどのような効果を持ったのだろうか。授業の実際の中身への評価

はさておき、そうした何らかの働きかけの結果、この回答をした学生の「認識」は前進したといえるだろうか、あるいは後退してしまったと言ふべきなのだろうか。

模範回答

仮に A,B の順序が逆であったと想定してみよう。その方が*私*には安心する結果といえるだろう。差別意識丸出しで、相手とのコミュニケーションを拒絶しているかのごとき B の回答から、A の回答をするまでこの学生の「認識」は前進した。少なくとも A の回答には隙がない。模範的な回答といっても良いだろう。

一方、B の回答に対しては様々な「教育」を施す必要性を感じるだろう。自分とは異なる個性を持つ人を尊重する必要性について、文化多元主義からセクシュアリティの構築性、マイノリティと呼ばれる人の立場の弱さ、様々な「知識」を動員して、この学生の認識を変えようと試みるだろう。

そうしてそうした努力の結果たとえば次のような回答がなされるようになれば、*私*は安心するのだろうか。

C 私はゲイやレズビアンの人に対しておかしいと思うことはありません。男が女を好きになったり、その逆であったり、同性愛であってもそれは個人の自由だと思います。自由に恋愛できないなんて苦しすぎると思います。ゲイやレズビアンの人を一人の人間としてみられない人達が不思議です。

この回答は二番目の問いかけに対する別の学生の回答である。仮に授業の結果、B の

ごとき回答がなくなり、みながCのような回答を書くようになったとしたら、その授業は成功した、と言うべきなのだろうか。その場合に気になるのは、AとCとの間にどれほどの断絶があるのか、という問いかけである。AがそのままBと一人の人物の中で矛盾せずに語られる状況において、A、Cの回答の持つ「問題のなさ」と教師はどう向き合えばいいのだろうか。

言説としての〈模範回答〉

AもCも、十分に模範的であるが故に、回答者の差別問題に対する考えとは無関係に産出されうる、ということだ。いわば学生はこうした「模範解答例」集のようなものを持っていて、必要とあらばいつでもそこからの「記述」を再現可能であろうということなのだ。だからといってCの回答は言うまでもなく、Aの回答だって、学生が心にもないことを適当に言ったのだ、といたいわけではない。心にあるとかなないと以前にこうした回答を産出する構えと言うべきものが備わっているのではないか、ということだ。

そうだとすれば、*私*の以下の努力は徒労に終わる可能性が高いであろう。

1. Bの回答の問題点を指摘して、考えを改めさせる。

かれらは*私*のくどくどとした説明を聞かずとも、*瞬時に*考えを改めることが可能なのだ。

2. C(やA)の回答にあるかもしれない不十分な点、揺らぎなどを指摘して、かれらの考えと回答のずれを引き出そうとする。

かれらは己の回答の不十分さに気づくや、より正しい「模範解答」を求めることが可能なのだ。

こうしてBの回答を「正し」、さらにA、Cの回答を「追いつめ」、かれらの回答がバージョンアップを重ねていくということに終始する場合、その過程でかれらはなにを学ぶのだろうか。もちろんそうした過程の中で、

「模範回答集」とは違った形で、差別問題に向き合おうとするものがでてくることを否定はしない。しかし他方で「模範回答集」に依拠し続けるものがあるとすれば、単に無限の「模範解答」の書き換えに終始するのみで、かれらが得るのは、もしかしたら「差別問題ってめんどくさいな」という教訓になるかもしれないのだ。

クローゼットの見せ物

そしてこの「めんどくさい」という心性は、差別問題に対して迂闊には近寄らないように、無難に接しようとする態度、「敬遠」と呼ぶべき態度、遠巻きにしてその現場を眺め、なにか態度表明を迫られるや「模範解答」を反復する態度の基礎をなすものである。差別問題教育はともすればこうした循環に陥る可能性を持っている。

こうした差別問題言説の中で、かれらは積極的に差別に荷担しないように振る舞うだろう。このときかれらは差別問題における「傍観者」「観客」の立場をとることになる。そうしてこうした「観客」としての態度こそ、セジウィックのいう「クローゼットの見せ物」の構造に他ならない。こうした構造において差別*問題*を見守る「善意」のかれらの視線は、あるいは悪意を持った差別者の挑発のたびに否応なく差別問題の場に引き出される被差別者を〈見せ物〉として浮き上がらせてしまうことになりうるのである。

(文献)

E. セジウィック(1990=1999)『クローゼットの認識論』